

永代美知代の少女小説にみる〈労働〉

有元伸子

一 少女小説研究と〈労働〉

岡田（永代）美知代（一八八五〜一九六八）は、広島県甲奴郡上下町（現・府中市上下町）出身の小説家・翻訳家である。一般には田山花袋「蒲団」の女学生・横山芳子のモデルとして知られているが、彼女自身も、明治末から大正末にかけて多くの小説や少女小説を発表し、『奴隷トム』（ストウ夫人「アंकルトムズケビン」）などの翻訳書も残した。論者は、現在、美知代の著作リストや評伝を作成し、彼女の作品や花袋との師弟関係の再評価をはかっているところである¹⁾。

美知代は、結婚・出産後の一九〇九（明治四二）年五月からは岡田から永代に改姓して作品を発表し、次第に少女小説・児童文学の執筆が多くを占めるようになる。本稿では、一九一〇年代に発表された少女小説を対象として、美知代がどのように〈労働〉を描いたのかを、ジェンダーを視座として検討する。家長制と資本制の交差する近代日本社会において、〈労働〉はジェンダーによる権力関係が現出する場だからである。なお、本稿では、〈労働〉を、対価が支払われる雇用労働・賃金労働だけではなく、たとえば家族のための家事・育児・介護といった主婦によるアンペイドワークも〈労働〉と見なされるという立場をとっている²⁾。

美知代は、作家以外の職業経験をもたなかった。同時期に少女小説を発表した尾島（小寺）菊子や、広島県にちなむ作家で美知代より遅れて執筆活動を始めた林芙美子や大田洋子らのように、多岐にわたる職業経験をもつ女性作家たちは、作品に、具体的な職業の内実を描き、

体験によって培われた社会的視線を反映させた。多くの職業を経験したこれらの作家とは異なり、美知代の小説や少女小説に見られる職業表象は具体性に欠けている。一方で、彼女の描く職業や労働は、階層・ジェンダー・宗教・地域性といった美知代の所属集団が培ってきた規範的慣習、いわばハビトゥスを知る手がかりとなる。現実の労働自体ではなく、彼女個人の労働に対する（固定）観念が見えてくるだろう。美知代は、地方の富裕層の令嬢であり、両親ともども熱心なクリスチャンで、長兄の実歴は米留留学経験をもつ著名な英語学者、自身も神戸女学院の出身で受洗していた。ところが、同階層婚や上昇婚ではなく、親の反対をふりきつての恋愛結婚を選択したことにより、都市の新中間層へと下降した。だからこそ書き得た事象も多いはずなのである。

それでは、これまで少女雑誌や少女小説に関する研究において、〈労働〉はどのように析出されてきたのだろうか。

久米依子は、少女雑誌に掲載された「少女小説」は、明治三〇年代後半からの発生前には、『近代日本のジェンダーの制度を補強し、「少年」との差異化を進めた面が認められる』³⁾と言う。立身出世や冒険物語を盛んに与えた少年雑誌と異なり、『明治期家長制社会の抑圧を被りながら、まずは日本型の〈家庭の天使〉―「良妻賢母」になるための「家の娘」の教訓譚として発展』⁴⁾し、その後は、『良妻になる資質としての』⁵⁾「愛らしさ」が強調されたと述べている。

渡部周子も、『少女期の教育とは、良妻賢母となるうえで必要な実学を授けると同時に、心性の教化を重視するもの』⁶⁾だと述べ、少女雑誌などによる教育においては、「純潔」・「愛情」・「美的」といった『少

女期特有の規範』が与えられたと言う⁴。久米・渡部の指摘を敷衍すれば、少女たちは、多くの少女雑誌や少女小説によって『良妻賢母』規範を内面化され、いわばあらかじめ職業から疎外され、良妻になるための「愛らしさ」や家の経営に必要な労働のみが勧められることになる。

一方、今田絵里香は、少年との対比や、少女の労働について、さらに詳細に述べている。少年にとつての「成功」とは、『学歴を獲得し、それによって社会的地位を得ること』(高所得と権力)であった。一方、高等女学校で「良妻賢母」のイデオロギーを内面化させられた少女たちにとって、現実的には、「成功」とは『学歴を獲得することによって上位の階層の男性と結婚すること』であった。だが、少女雑誌が少女の成功モデルとしてあげるのは「芸術家」や「スター」(宝塚)であることから、今田は、少女雑誌が『描き出した理想的な女性の主流は、決して良妻賢母ではなく、どの時代においても職業達成した女性であった』とまとめる。少女のおかれた現実と、少女雑誌が提示する成功モデルとが乖離していたというのである。

いずれの先行研究でも、具体的な少女小説を分析しつつも、基本的には有名小説家や無名投稿者たちを群として扱うメディア研究の手法によって少女小説・少女雑誌を解析している。こうした共時的な雑誌研究に、通時的な作家研究をリンクさせていくことにより、少女小説の研究はより深化していくことになるだろう。本稿では、こうした観点から、永代美知代の少女小説に描かれた〈労働〉表象を検討していく。

二 少女が憧れるべき職業

―先生、博士、記者(作家)

最初に紹介するのは、「長い指短い指」(『少女世界』大正五年七月)である。足の中高指が拇指よりも長いと『親よりも産れ上つてる人』

で『出世』する、という少女たちの間の『昔からの云ひ伝へ』があった。

『ね花子さん、あなた大きくおなりなすつたら、何になるおつもり?』

『さうね、学校の先生も可いわね。』

『私も女学校の先生になりますわ。』

『アラ、私女子大学の先生よ。』

二人は幸福な未来を夢みて、思はずにつこり微笑み交しました。

足指の長い花子と信枝の二人の娘が夢見る『幸福な未来』とは、『学校の先生』・『女学校の先生』・『女子大学の先生』――すなわち教師であった。高等教育を受けて、知的な職業としての教職に就くことが少女たちにとつての『御出世』だとされているのである。

同時代には、各種の女性向け職業案内が出版されているが、そのうちのひとつ、鴨田坦『現代女子の職業と其活要』(成蹊堂、大正二年)では、四種類の教職が掲載されている。本文中では、『専科教師』と『幼稚園保姆』は、『小学校教員』(目次と本文の記載が異なる)の項に組み込まれているので、実際には、『小学校教員』と『高等教育家』の二部立てである。小学校教員では、『昔から現今に至ります迄、何処の国に於きましても、小供を育てると云ふ事は私共婦人の職務であり』、『愛の権化と云はれて居る私共婦人には、最も適当した職業だと存じます』と、女子の特性をきわめて情緒的に説明する。小学教師は正式の資格をもった者のほか、代用教員でもなれるのである。

一方、『高等教育家』については、初等教育家よりもさらに『殊に光輝ある聖務である』とされる。『嘗て学習院女子部長で居られた下田歌子女子は勅任官でありました、又音楽学校教授であつた幸田延子女史は校長よりも位階が高かつたと聞きました』と前置きして、『修

身、国語、地理、家政 従六位（五等） 前守ふみ……と、東京女子高等師範で位階を持つ女性教員を列挙していく。女子の高等教育家が名誉ある知的職業であることが示されるのである。

小説では、足指が短い邦子は絶望する。

『どうせ私は女中になつて死ぬかもしれないわ。』

微かに笑ひながら云ひましたけれども、邦子さんの声はひどく震えて居りました。

『可いわ邦子さん、あなたが女中になつたら、私の家へいらつしやいな、私屹度大事によく御世話してあげますわ。』

少女たちにとって、女学校や女子大学の教師という幸福な将来像の対極におかれるのが《女中》であった。一定の階層の少女たちにとって、《女中》は最下層の職業として認識されるとともに、かわいそうな女中を女主人が世話をするといった物語が共有されていたのである。

このあと一人で思い悩む邦子の夢想の中で、いつのまにか中高指が次第に長くなっていく。『うれしい！ 私も女の博士になれるんだ。』と喜ぶ邦子。だが、指が長くなりすぎて困惑していたところ、再び元の長さに戻って安堵する。

『その代り私は、花子さんと信枝さんにまけないやう、誰よりも真面目に勉強して、大人になつてからまごつかないように、心掛けなくつちやならない、指の長い短い位で、馬鹿々々しい心配をしたり、あてにもならない運不運に気をくさらせて、泣いたり笑つたりしてる場合ぢやない、それこそ今のうち一生懸命何彼に気をつけて勉強するのが一番好い。』

斯う思ふと、邦子さんは今までの無遮苦遮がからりととれて、すが／＼しい気持になりました。

庭の何処かで駒鳥が鳴いて、丸窓近い楓の若葉が希望の色に輝いて見えました。』

「長い指短い指」では、《宮様の妃殿下》や《外国の王様のおきさき》といった夢物語とは異なり、女学校や女子大学の教師や女の博士になることが実現可能な女子の幸福として示される。そのために《一生懸命》《真面目に》勉強することが重要なのである。

明治末年に発表された「揺籃の丘」（『少女』（女子文壇社）明治四五年四月）でも、少女の夢は知的な職業に就くことにある。《産れて初めて親の膝元を離れて、遠い学校の寄宿舎へ入つて行く》芳子に、母親は荷物の支度など何くれとなく面倒を見てやる。理解ある母親によつて、女学生の自分は一生懸命に勉強することであることと、加えて身だしなみにも気を配るべきことが示され、《二人はまたお顔を見合つて、につこり笑ひ交しました》と母―娘の強い情緒的絆が確認される。母親に支度疲れを気遣われた娘は散歩に出る。

《女学校に入つて、優等で卒業して、やがては女子大学にも入り、立派なものになつて母様に喜ばれたい――

一葉女史のやうに、晶子女史のやうに……と思ふと、何時か雑誌の口絵で見たことのある、若くて而して美しい女流記者の立姿がくつきりと眼の前に浮んで、楽しい空想がそれからそれへ湧き出すと、芳子は自分がその女流記者なのか、女流記者が自分なのか解らなくなつて、ただわな／＼身うちが慄へて来るのが常でした。》（傍線は引用者による。以下同じ）

女学校、女子大学を優秀な成績で過ごし、《立派なもの》になることが即ち親孝行だという認識が語られる。憧憬の対象は、樋口一葉、与謝野晶子といった著名な女性作家であり、そうした憧れを喚起させるものが、《雑誌の口絵》に載せられた《若くて而して美しい女流記

者の立姿》であった。芳子は、自らを口絵写真の記者たちに模して幻術的な興奮にわななく。

ここで、樋口一葉や与謝野晶子といった作家と《女流記者》とが同種のもので扱われているのは、今日的な感覚では違和も覚える。だが、同時期に出版されていた数種の女性職業案内を見ると、文筆を職業とするものとして、両者は必ずしも劇然と分けられていたわけではない。『現代女子の職業と其活要』（前出）でも、《文学者》と《婦人記者》とは別項目とされてはいるものの、与謝野晶子、岡田八千代、長谷川時雨らは、両方の項目に名前があげられている。《婦人記者》の項目には、時事新報の下山京子や東京日日の山崎千代子らのライター以外に、《禅学令嬢で有名な平塚らい鳥女史も青鞥の経営に従事して御出》だとされ、記者と作家の区別は厳密なものではない。婦人記者に適した資質としては、《先づ文学者》と文才があることがあげられ、ほかに訪問記者をこなす社交性などがあげられている。《修学、出身の経路》としては、《出来るならば英独仏の語学》があり豊かな知見をもつことが要件のため、《高女を出て女大に学ぶもよろしかろうし、女子英学塾に遊ぶもよろしかろうと思ひます》と述べられる。いずれにせよ、文才のある女性の知的職業として両者は同種のものだと見なされていたのである。

さて、このあと「揺籃の丘」では、散歩の途中で、芳子は《夕日に輝いた白壁の土蔵の後に、一際高い二階家の見える》自分の家を見ているうちに、思わず涙をこぼす。そして姉の跡を追ってきたあどけない弟と顔を見合わせる。

《……お互に泣いたり、笑ったり、拗ねたり、怒ったり十幾年間と云ふ永い年月を、同じ家、同じ親の膝下に起居して、たゞの一日とて顔を見合はないでは居なかつたものを、斯様して顔を見るのも、ものを云ふのも、もう今日一日限りかと思ふと、堪らなく名残りが惜しい。

あゝ嬉しい遊学、悲しい別れ。

『次郎ちゃん。』

芳子はなつかしさの余り、弟の方に手をかけたが、しまひにはいきなり抱き寄せて弟の無邪気な顔に、自分の涙の頬をすりつけてないた。』

美知代が、基本的には、西洋志向、近代的な上昇志向の持ち主であったことは、別稿で述べた（注1④）。《西洋／日本・東京／地方・辺境》という地勢的なヒエラルキーのなかで、立身出世し《立派なもの》になるためには、地方から、より西洋文化に近い都会に出ていく必要があるのだ。しかし、そのためには、十数年の間、共に暮らした家族や郷里の家と別れなければならない。「揺籃（＝ゆりかご）の丘」というタイトルには、慈しんでくれた母・かわいい弟などの家族や懐かしい郷里から離れる悲しみと、新しい世界へと入り《立派なもの》になる期待感と喜びとがこめられている。古い郷里でゆりかごのごとく大切に培われてきた才能からこそ、都会で大きく開花するといった認識が示されるのである。

美知代自身も、上下小学校を卒業すると、数え年一三歳で《白壁の土蔵》のある実家を離れて神戸女学院に進学し、さらに自ら望んで田山花袋に弟子入りして、一九歳で上京した。この作品に描かれたのは、美知代自身も歩んだ道であった。作品発表時の明治四五年までには、美知代は『ホト、ギス』『スバル』『中央公論』といった一流文芸雑誌にも作品を掲載するようになっており、《閨秀作家》として一定の評価を得ていた。また、夫の永代静雄の勤務していた『中央新聞』や『富山日報』などに、記事も掲載しており、女性記者に近い仕事もこなしていた（注1⑤）。美知代が描く少女の憧れの仕事に、まさに美知代自身が就いているのであり、いわば少女たちに自らの来し方を語り、後につづく少女たちへ道筋を示している、といった体の作品なのである。

「長い指短い指」・「揺籃の丘」の二作品から見られるように、美知代が描く少女の理想的な将来像は、決して家庭の天使としての良妻賢母ではないし、生活のための仕事をすることもない。美知代の少女小説において、少女にとっての憧れの未来像は、女学校や女子大学の教師、博士、女流記者、作家などの知的職業への就業によって自己実現を果たすことなのである。これらの新時代の少女たちは、母親から豊かな愛情を注がれ、地方から都市に出て女学校に進学し、教師や記者になることが親孝行だと期待される。美知代にとっては、ジェンダーよりも階層の方が上位に設定されているが（注1⑥）、女性であっても才能と環境に恵まれていれば《立派なもの》になることができる、少年と同じ《成功》を希求できるという認識がある。そのためには、一定以上の階層の出身であり、地方から中央に進学できる経済力などの環境に恵まれていなければならないのである。

二 救済者としての教師、寄宿舎の舎監

美知代は作家以外の職業体験をもたなかったこともあり、作中で各種の仕事の具体的な内実が描かれることはごく少ない。その例外が教師である。神戸女学院での体験をもとにしたと思われる作品を、一般小説でも少女小説でも書いている。

『少女小説 サマー、ハウス』（『少女画報』大正2年8月）は、両親を失い、学校の校長（尼僧）に世話をされている謙子が主人公である。今日で学期が終わり、明日から夏休みという日。他の寮生たちは、《高鳴る鼓動を無理と押し静めく、家郷の人達への土産物を取り揃へたり、行李を整理し》、《あなた明日の一番？》／『勿論よ、あなたは？』『私だつて一番だわ』といった楽しい会話を交わし、謙子は夕闇のなか、一人物思いにふける。

《謙子には父もありません。母もありません。此の世の中に、

骨肉と云つては姉が一人、遠い長崎の女学校に、丁度謙子が此校の校長に世話されて居る、それと同じやうに彼地の学校の聖な尼様に養はれて居るのがあるばかり物附いた時分から、謙子は泌々人知らぬ心細さ、もの淋しさを味はねばなりませんでした。》

《帰つて行くべき家郷の無い》謙子は、寄宿舎の学生たちが実家に戻つてしまふ夏休みが苦痛である。夏の間、寄宿舎は閉まり、謙子は別の家に預けられるのだ。《去年の夏、謙子の身を寄せた処は、さる英国人の家庭で、婦人が甚いヒステリーな上に、お子達が太勢あつて、謙子は夜昼そのお守》をしなければならず、《仏蘭西語より知らない》謙子にきかぬ子供たちは悪口ばかり投げかけて、随分困らされたのだった。思わず、謙子は、『あゝ母様さへ居て下すつたら！』と涙し、『私にだつて家郷があつたんだ』と、《白塗の長い土堀に囲まれた》《田舎の土族屋敷の自分の家》と、母親が亡くなったときのことを思い出す。と、目の前に白い母親の姿を見て、謙子は思わず『母様！母様！』と叫ぶが、それはテラスを上がつてくる校長であつた。

《『先生！』

謙子は轟と寄り添ふた。十四の春姉と別れく々に、斯うした慈悲深い校長の手に引き取られて居たらこそ、父も無い、母も無い、貧しく育たねばならぬ自分までが、今日人並以上の教育も受け得られるのである——謙子は今更のやうに感謝の眼を挙げた。

『先生、もう三年にもなります、いろくお世話になりました……』

斯うお礼を云つた謙子の顔を見据えたまゝ、

『何のお恥ずかしい！』

年若い尼僧の眼から真珠のやうな涙が溢れて落ちました。》

尼僧の校長が謙子を散歩に誘い、《二人は莞爾に微笑み交して》静かに歩く。よい香りのするアカシアの花が咲き乱れている描写で、物

語は閉じられる。

「揺籃の丘」で見たように、美知代の作品には、高等教育機関の教師や作家・記者といった知的職業に就くことが少女自身を生かす道であり、その点で少年と変わらないというメッセージがこめられている。一定の年齢になれば、少女たちは家族と別れ、ゆりかごのような故郷を出て、都会の学校に進学する。恵まれた環境にあるからこそ、自己実現が果たせるのである。

だが、両親の死など、環境に恵まれない少女にも高等教育への道が完全に閉ざされているわけではない。それが、ミッシヨン・スクールによる慈善的な教育であった。佐藤八寿子は、ミッシヨン・スクールでは《裕福ではなくても教会や学内外の仕事を手伝いながら学費を免除されたエピソードなどは複数残っている》¹⁰と云う。

「サマー、ハウス」の謙子も、フランス系の学校の校長の善意によって、修学する。《謙子は悲しい、遺瀨無^{遺瀨}い、味気ない思ひに襲はれる度には、矢鱈とスペリングの暗記》をして気をまぎらわせる。こうした勉学のかいあって、謙子は校長とフランス語で会話を交わすことができ、結末部ではシスターフッドな関係を築くに至る。これからは若い校長の尼僧が母親代わりになることを予感させる甘い情感の漂う結末である。

同様のモチーフが扱われているのが、「貧賤の身から発奮して女学校の教師に！」(『少女世界』大正三年一月)である。中塚先生危篤の知らせに折りを捧げる少女たちの姿から始まり、数年前の〇〇女学院の出来事が回想される。級長をしている中塚幾子が《穢多》^{穢多}であり、彼女の父親は《下駄齒入れ》の仕事をしていると生徒たちに知れ渡ってしまうのである。そもそも、中塚幾子は、明石に避暑に来ていた女性宣教師が、海岸で熱心に読書をしていた彼女の不幸な境遇に同情して学校で引き取ったのであった。

《朝に晩に、宣教師の寝室から書斎^{スクリュー}のお掃除を受持つて、時

間々々の校鐘鳴らしに、授業中他人よりも五分づつ早めに教室に出なければならぬ幾子の成績は、受持の先生方が驚ろかれる位の出来で、いつも満点のとりつづけといふ有様でした。おまけに、うまれついで物やさしさは、温雅、貞淑、謙遜、あらゆる女徳を兼ね備へてあるやうに見えました。

斯うして中塚幾子は、級長としてあげられたばかりではありません。全校の模範的生徒とさへ呼ばれて居りました。

けれども、それは彼女の身元の知れてなかつた昨日迄の事でした。穢多の娘、はいれやの子と解つた後は、殆んど普通の交際さへ許されなくなりました。》

被差別部落出身者に対する当時の女学生たちの差別意識はさまざま、《変な臭気がする》などと忌避する。仲間外れとなつた幾子は、図書館にこもつて、《雑誌と云はず、書物と云はず、書棚にあるかぎりの書物に読み耽つて》勉強した。数年後、中塚幾子は女子大学を出て母校の教師となる。同僚の山家先生は、中塚幾子が肺病になつたのは、自分たちが仲間外れにしたために図書館にこもつてばかりいたからだ^{からだ}と謝罪するが、中塚先生は、皆と一緒に騒いでばかりいたら自分は今頃どうなつていたかわからない、今日の自分があるのは皆さまのおかげだと、《心から感謝》を述べる。

「貧賤の身から発奮して女学校の教師に！」は、今や《徳望は全校随一》となつた中塚幾子の危篤の報に接した生徒一同の悲嘆を語つて閉じられるが、続編「仲間はずれの少女」(『少女世界』大正五年九月)では、中塚幾子の死と、《しみぐと前非を悔いた私達》の思いが語られる。中塚幾子は、《普通科四年生頃から、立派な英詩を作つて、外国の教師方^{せんい}を感心させ》るほどの秀才で、《普通科を卒業後、院長は中塚さんに英語を受持させ、予科生を教へながら、それによつて学資の補助を得、高等科に進ませ》た。ところが、彼女が《新平民の娘だと云ふ、それだけの事で》、《私達は上級生のおだてに乗つては、よ

くストライキして、中塚さんを困らせた》のだった。

前作では《〇〇女学院》とほかしてあった学校名だが、「仲間はずれの少女」では《神戸女学院》だと明示してある。美知代が神戸女学院に入学した明治三十一年の神戸女学院同窓会報「めぐみ」一八（明治三十一年八月五日）の八月の「院内記事」には、《二十二日 中塚幾子姉病痾全快せしにつき教授及事務の助手として此日帰院せられたり》と全快が伝えられるものの、次号一九（明治三十一年一月二五日）の「院内記事」九月には、《十二日 中塚幾子の訃音をきく学院より十数名会葬》と死去が報じられる。「めぐみ」同号の付録「園の落葉」第三集には、立石久による「中塚幾子の永眠をきよて」の詩が掲載されている。また、山家悦子の名前も「めぐみ」には何度も登場している¹³。中塚幾子・山家悦子ともに神戸女学院に実在の、美知代にとっては先輩でもあり、教師でもある人物であった。

少女が出世するためには、学歴が必要であり、そのためには都会へ遊学させるだけの家庭の経済的な余裕と、女子に勉学を認める理解と愛情とが必要であった。女学校に通える階層の娘は限られている。美知代は、環境に恵まれない少女であっても、クリスチャン・スクールでは救済の方途があることを示す。ただし、それは人並み以上の才能と努力が必要な険しい道のみではあった。

作家以外の職業体験をもたない美知代にとつて、神戸女学院での生活を通して見てきた教師の姿は身近なものであり、一般小説でもしばしば描かれる。その際には、たとえば《老嬢》¹⁴の女性教員の、結婚への焦りであるとか（《老嬢》¹⁵）、女性教員同士の恋愛であるとか（《老嬢の告白》注1⑤）、女性教頭の美しい女学生への盲愛といった（《秋立つ頃》¹⁶）、《テヤレスト問題》も扱われるなど、自身の人生やセクシュアリティに煩悶する女性教員の姿が描かれている。また、女学生と女性教師とは常に友愛に満ちた関係を結べるとは限らない¹⁴。しかし、美知代は、少女小説においては、憧れの職業としての教師のイメージを損なうことなく、不幸な少女を救済する聖職としての教師像

を一貫させている。

四 健気な少女（孝女）表彰譚／少女不幸物語 —家事労働者、電話交換手

一方、美知代は、当時の少女小説のトレンドであった少女不幸物語も書いている。

「梅日和」《『少女世界』大正五年三月》の主人公・寿美代は、《生まれながらに》《勝れた容色を持った少女》であった。《一見女学生かとも思はれる程の気品》もあるが、家が貧しいために女学校に行けず、電話交換手となる。見学に来た女学校の生徒のなかに小学校時代の同級生がおり、《ちろり、嘲るやうに見据ゑては、並んで立つた其隣の少女の耳に何事かを囁く》ように見える。《泣き度い、泣きたい、泣いてく、いつその事泣き死んでしまひ度い！》と、自らの不幸を嘆く寿美代であった。だが、仕事帰りに、三つばかりの女の子を背負い、七、八歳の妹の手を引き、この寒空に破れ袷一枚着ただけの姿の十四、五歳の少女と出会う。少女の両親が死んだことを聞くと、寿美代は彼女に電車賃を渡す。

《寿美代はちつとその後姿を見送りましたが、同情の涙が双頬を伝ふて落ちました。

『世の中には気の毒なかたがあるものだこと！』

さう思ふと、今の今まで不平に思つた自分の身の上、案外仕合せなものにも感じられ、貧乏でこそはあれ、まだ其日其日を過し兼ると云ふでもなく、温かい父母の慈愛に、しつかり抱かれて居る幸福さをしみじみ身にしみて考へました。

『女学校へ行けなくとも可い、私は私の道を真直ぐに進んで、父様や母様を御安心させなければならぬ……私は幸福だ！』

寿美代はいそくとベンチを立ちました。

小鳥がちゝと鳴いて、心地よい梅日和です。」

《電話交換手》という職業を扱ってはいるが、仕事の内幕が描かれることは全くない。経済的に女学校に行けなかった少女が、電話交換手の仕事不幸だと観念的に思っているばかりである。

鴨田坦『現代女子の職業と其活要』（前出）の「電話交換手」の項では、《職業としては他の女工かそんなものよりは、余程高尚でありませぬ》とし、学歴は、《尋常小学校卒業程度以上と限つて》いるが《高等女学校卒業のものも沢山》ある。昼勤と夜勤があり、交換手控室には雑誌類もおかれて、同僚と話せて楽しい職場であると述べ、《このやうですから交換手と云ふ職は他と比較しますと誠に便利のある、又たのしい仕事であります》と言う。

労働の楽しさが美知代の小説には全く描かれることがなかったのは、美知代自身や美知代の属する階層の持つている職業観——知的職業以外の職種に対するある種の偏見を反映しているものと思われる。この小説では、女学校に進学できない階層の少女に対して、自分よりもっと不幸な境遇の少女がいることを示し、自足とあきらめとを教える。ミツシヨン・スクールで救われた前節の少女たちと異なるのは、知力であった。「サマー、ハウス」の謙子は《田舎の士族》の娘であり、「貧賤の身から発奮して女学校の教師に！」の中塚幾子は《新平民》の娘だという違いはあったが、いずれも読書が好きで一生懸命に学び学力も高かった。こうした娘は、苦学しながらも救済され、一方、容色については書かれても学力に関する記述はない。「梅日和」の寿美代は、自足を覚えさせられるのである。

作家以外の職業体験をもたず、労働についての引き出しの少ない美知代が身近に見ていた職業の一つが、女中や子守女といった家事労働者であった。

「少女小説 ゆく水」(『少女世界』大正四年四月、八月)は、父の仕事の失敗により小間使いになる娘が、最終的には女同士の友情に

よつて救済される物語である。

十六歳の石川清子は、会社社長の父が詐欺罪に問われて会社が破産し、学校を退校した。清子は、家計を助けるために、花村弁護士宅で住み込みの小間使いになる。「長い指短い指」の邦子が絶望した女中職である。清子以外にも小間使いにはお宮がおり、ほかに子ども世話や洗濯をする婆やや、お三どん(『御飯焚き』)のお安さんも働いていた。

同僚のお宮は、行儀見習いのために小間使いになっており、実家から毎月三円の小遣いを送金され、派手な友禅羽二重の着物に華やかな半襟をかけ、ルビー入りの指輪をはめている。金銭的な余裕のない清子は恐れをなす。だが、自分の仕事しかしないお宮に対して、清子は忙しい婆やの代わりに子どもたちの相手をすることもあり、『清や、清や』と慕われる。人望のある清子はお宮から妬まれて、自分が割つたのではない陶器の破損の罪を着せられてしまう。ある日、女学校時代の友人・山口愛子が偶然遊びに来る。愛子の仲介で、花村弁護士が父の裁判の弁護を担当してくれることになり、光明が見えてきたところで物語は閉じられる。

全五回の連載もので、美知代の少女小説にしては比較的長い作品であることもあり、小間使い、婆や、お三どんといった職掌の違いなどもよく描写しているものの、全体としては、不幸な境遇に陥つた少女が、困難をのりこえつつ真面目に働き続けていくうちに、旧友とのシスターフッドな関係によつて救済される定型をなぞつた物語である。

「十六で表彰された親孝行な子守女」(『少女世界』大正四年一月)

は、感心な子守女の紹介である。《私の郷里にあつた話です》と語り手は語り始める。《備後の尾道》から《ずつと北》の《備後の国甲奴郡本郷村といふ淋しい片田舎がございます。／＼その本郷村で一番の財産家、永井家の奉公人にたけ女と云ふのがありました。たけ女がお嬢様付き子守女としてはじめて御奉公にあがつたのは、まだやつと十

一の春でした。》

たけ女は、よく働く娘で奥様にかわいがられるが、大工の父親が大怪我をして《身動きの出来ない片輪者に》なってしまう。それからたけ女は、主家の仕事はなおざりにせず、毎晩仕事が終わったあと小半里の道を駈けて親の家へ戻り、一晩父母を慰め、一番鶏とともに主家に戻る。気の毒に思った奥様が、七日ごとに暇をやると言っても肯わない。主家で自分に出された食事のおかずを残し、あるいは、「やにぎり」という河魚の手づかみ漁をして、親に食料を届ける。最初は妬んでいた他の女中たちも、たけ女の誠実さを前にして自身を恥ずかしかるようになる。そうしたたけ女の働きが認められ、県庁が《親孝行な感心な娘として》《六ヶ年間勤続の忠婢として》表彰した。

《無教育な賤しい子守女でありながら、何と云ふ立派な、感心な心がけの女でせう。

皆様、たけ女は今も遠い備後の山里に、主を思ひ親を思ひ、専心ひたすら自分のつとめを尽してゐます。どうぞたけ女の上に幸あるやう、私は皆様と御一緒に祈りたいと思ひます。》

この作品が書かれた時期には、都市部を中心に、家事労働者の意識が変化していた。松波夫人「下女の使ひ方」(『家庭之友』明治四二年三月)は、《昔は下女と申せば主婦に対しては主従の關係》であつたが、《今日の下女》は全く異なり、《主従の觀念は少しも無く、労働に對する報酬を受けるのが目的であつて、主婦と下女との關係は雇主と被傭者との關係にすぎぬ事になつてまゐりましたからして、使ふ方も其のつもりで使はぬと、大変な間違ひが出来ます》と述べる。明治後半から大正期にかけては、主人に中世をつくす主従關係から、契約による雇用關係へと轉換していく過渡期だったのである。

別稿で詳しく検討することになるが、美知代の一般文芸では、都市

雇用者の家庭における(家事労働)の内実や、それを担当する(主婦)と(家事使用人)の關係が問われる。たとえば、「女子大学英文科出身 新夫人の打明話」(無署名II推定・永代美知代作、『中央新聞』明治四二年一〇月一―一月)では、主人公の女性は年少の頃から学校の寄宿舎に入れられて《書生生活》ばかりで結婚後に初めて家事をするためにうまくこなすことができない¹⁵。こうした設定により、家事をしない男性作家や難なくこなせる階層の女性作家であれば見逃されがちで、当時の家事労働の内実や苦勞が実に細かくユーモラスに描かれるとともに、《下女》を雇い使うことの困難も語られる。「小説 郷里のをんな」(『婦人評論』大正三年二月)でも、親代々の《恩顧の仲》の娘が故郷から《下女》として上京してきたことにより、《すれつからし》の東京者を使わなくてすむと喜ぶ女主人の姿が描かれる。ここには、(家事使用人)(下女・女中)と主人との關係が、地縁による忠義で結ばれた前近代的な關係から、契約で結ばれた都市の近代的な關係へと變化していく時代相が反映している¹⁶。

これに對して、たけ女に對する「孝女」表彰は、まったく近世的な忠孝の倫理觀によるものである。たけ女の行為は、主家や親への一方的な奉仕であつた。都市部の女中の意識が、主従關係から契約に基づく雇用關係へと變化していくことを背景に、すでに都会に出た語り手の《私》は、《遠い備後の山里》で《主を思ひ親を思ひ、専心時分のつとめを尽くして》いる利他的なたけ女の幸福を、《皆様》と一緒に祈りたいと言う。地方に残存する無学で主従關係を尊重するたけ女の存在を、都会にいる語り手はとおしむのである。ただし、それは自身や少女雑誌の小説を読む少女たちとは全く階層の違うものとして、自身が雇用主となる場合にはこのような娘を雇いたいという意味での慈愛の念であつた。

この節で紹介した美知代作品の少女たちは、主家や親に忠孝を尽くす感心な娘として雇用主の視線から賞賛されるか(二十六で表彰された親孝行な子守女)、自らの分をわきまえて充足感を得るか(『梅日

和)、ごくまれに勤勉や正直などの長所によって救済される(『少女小説 ゆく水』)といった展開をとる。ここでも、少女が理想的な成功を得るためには環境(恵まれた階層・経済力・学力など)が必要であることが示されるのである。

※ ※ ※

以上、永代美知代の一九一〇年代の少女小説を検討し、その労働象・職業観の可能性と限界を見てきた。

新時代の少女たちのうち、恵まれた階層の娘は、母親の愛情を豊かに注がれ、実家の経済力を背景に都会へ遊学することが許される。自らを育んだ母胎としての故郷を懐かしみながら、都市の女学校で学ぶ少女たちは、女学校や女子大学の先生、博士、作家、記者といった、知的な職業な職業に就くことを自己実現の目標とし、その夢をかなえ出世することがひいては親を喜ばせることだと感じている。恵まれな環境の少女も、学力や勤勉があれば、苦労はするものの、ミッシェン・スクールのような救済措置も用意されている。

一方、環境がそれを許さない少女もいる。少女不幸物語で描かれる少女たちは、より不幸な少女を見て自足を知ることが学ばされるか、ごくまれに勤勉・正直の美質やシスターフッドな関係によって救済されることもある。そこには、知的職業以外の職種に就業することへの、ぬきがたい固定観念が存していた。

また、明治末から大正期にいたり、都市部では女中の意識が、主従関係から契約による雇用関係へと変化していく過渡期であった。こうしたなか、地方に残存する、無学な娘による主家への絶対的な忠義心は、雇用主の視線から賞賛される。雇用者と被雇用者との間には決定的な階層差が存在するのである。

美知代は近代的な上昇志向・西洋志向の持ち主であり、ジェンダーよりも階層を上位におき、女性であっても条件に恵まれれば男性と同

じように成功できるというメッセージを少女たちに与えてきた。良妻賢母イデオロギーを反映し、他者から愛される娘であることを求める当時の主流の少女小説の中にあつては、エリート志向の少女に対する力強い励ましになったものと思われる。しかし、にもかかわらず、現実には女性の成功は困難である。そうした女性の生きにくさはどこから生じるのか。美知代は、その要因の一つとして、「家事労働」の負担の問題を一般文芸で追求することになるのだが、これに関する考察は別稿に譲りたい。

注

¹ 岡田(永代)美知代に関する拙稿は、以下の通りである。

- ① 「広島の女性作家・岡田(永代)美知代研究(1)―研究の現状と課題」(『内海文化研究紀要』三九、二〇一一年三月)
- ② 「広島の女性作家・岡田(永代)美知代研究(2)―著作の概要」(『広島大学大学院文学研究科論集』七一、二〇一一年一月)
- ③ 「資料翻刻」永代美知代「国木田独歩のおぶさん」(『内海文化研究紀要』四〇、二〇一二年三月)
- ④ 「地域性」をめぐる攻防―岡田(永代)美知代と田山花袋の描くローカリティ」(『近代文学試論』五〇、二〇一二年一月)
- ⑤ 「資料紹介」『中央新聞』掲載の推定・永代美知代作品「老嬢の告白」―付 岡田(永代)美知代著作リスト」(『内海文化研究紀要』四一、二〇一三年三月)

※著作権継承者の許諾を得て、広島大学学術情報リポジトリ(HiR)で作品全文をPDFで公開している。

<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00033923>

⑥ 「作者」をめぐる攻防―田山花袋「蒲団」と岡田美知代の小説」(『日本近代文学』八八、二〇一三年五月)

² 大沢真理は、『労働(Labor)』とは、骨を折り苦心して財やサービスを作り出すことであり(陣痛、出産という意味もある)、分業と

- 協業をつうじておこなわれている」と定義し、《現代の社会では、多くの財・サービスが商品として売り買いされており、労働の相当の部分も、賃金労働または雇用労働として、労働市場で取引される商品とみなされる》が、雇用労働だけが労働ではないとする。《家庭で家族のためにおこなわれる炊事、育児、高齢者介護などは、従来の主流経済学や常識では、「労働」ではなく「消費」活動とみなされた》が、《女性の経験にもとづくフェミニストの申し立て》により、近年は「労働」だと見なされるようになったと述べる。(「序論 経験知からの学の射程の広がり」『ジェンダー社会科学の可能性 2 承認と包摂へ』岩波書店、二〇一一年)
- 3 『少女小説』の生成』「はじめに」 「序章 少女の世界」 「第6章 構成される少女」 青弓社、二〇一三年
- 4 『少女』像の誕生』 「序章 近代国家における女性の国民化」 新泉社、二〇〇七年
- 5 『少女』の社会史』 「4 『少女』の成功」 勁草書房、二〇〇七年
- 6 同書の目次に記載せられた職業は、以下の通りである。
 《医師／歯科医／小学教師／専科教師／幼稚園保姆／高等教育家／書家／音楽家／文学者／婦人記者／薬剤師／産婆／通信手／電話交換手／看護婦／タイピスト／写真師／茶道指南／華道師匠／商店員／計算事務員／製糸及養蚕教師／手芸／美容技術手／琴の師匠／印刷局女工／鉄道院事務員／専売局女工／案内業者(ガイド)／速記技手／女優》
- 7 たとえば『女子文壇』などの投稿雑誌に女性作家の口絵写真が掲載されることはしばしばある。美知代自身も、雑誌『処女』(大正四年三月)の口絵に、夫・静雄と息子・太刀男とともに写った家族写真が掲載され、少年雑誌『ニコニコ』では作品の冒頭に顔写真が掲載されるなど、その肖像は一定程度露出していた。
- 8 この「揺籃の丘」が掲載されている雑誌『少女』の同号には、「聞

秀作家小伝」の特集が組まれて、二三人の女性作家たちの簡単な履歴が三頁にわたって紹介されている。与謝野晶子や岡田八千代らに比べると短文ではあるが、美知代も名前があがっている。

▲永代美知代▲

本姓は岡田、備後国上下町の生れにして、現在は、新聞記者永代静雄の夫人たり。短篇小説の作多し。本年二十七歳。(現住所、東京市外高田村字豊川三十八番地)

- 9 一般小説では、『老嬢(オールド・ミス)』の女性教員の波瀾万丈の人生を描いた「老嬢の告白」などがある(注1⑤)。

- 10 『ミツシヨウ・スクール』 「第一章 忌避と羨望のアンビヴァレンスー明治」 中公新書、二〇〇六年

- 11 『神戸女学院百年史 総説』 「第四章 充実の時代／第二節 学院の経済 同窓会の貢献」 (神戸女学院、一九七六年) によれば、『明治四十年(一九〇七) 四月現在の学院専任及び嘱託教師は男九名・女一六名合計二五名、そのうち日本人は男九名・女九名で合わせて一八名、米国人はすべて女で七名となっている。また日本人女教員のうち学院卒業生は三名であった』という。また、美知代は、『女子文壇』の「文壇の花」特集号で天賞を受賞した小説「侮辱」(『女子文壇』明治四一年四月)の中でも、『山家悦子』を登場させている。

- 12 『文章世界』明治四一年四月

- 13 『希望』大正四年二月～五年一月。なお、宮内俊介が翻刻紹介している美知代の晩年の未発表原稿「女学生の恋物語」(『田山花袋記念館研究紀要』一二、二〇〇〇年三月)は、この「秋立つ頃」の改作である。

- 14 沼田笠峰「現代少女とその教育」(同文館、大正五年)には、教師を怖れる生徒や、生徒から敬遠される舎監の悩みが多く掲載されている。

- 15 注1⑤でも概要を紹介している。

清水美知子『女中』イメージの家庭文化史』第3章 社会問題化する女中（世界思想社、二〇〇四年）では、大正期の《女中牀の要因として、①第一次世界大戦をきっかけとする好景気により、女中以外の就業機会が増えたこと、②進学率の高まりもあって女中を希望する女性が減ったこと、③女中の意識が変化し、前近代的な主従関係が嫌われていること、④長時間の拘束のわりには女中の賃金が安いことなど、おもに女中を供給する側の要因》の説を紹介するとともに、《明治も後半になって、都市部を中心に官吏や会社員などの家庭が新たに女中雇用層》として加わり、これら新中間層が大正期に入ってから急激な増加も要因の一つであると解説している。

付記

本稿は、次の二つの口頭発表の後半部分を独立させて、補筆したものである。

・「女性作家の「労働」表現―地域からの発信― 岡田美知代」（富山大学人文学部シンポジウム、二〇一三年一月二八日、於・富山大学人文学部）

・「特集 女性作家の「労働」に関する1910年代の文学表象 岡田美知代を事例に」（日本近代文学会北陸支部大会、二〇一三年一月三〇日、於・富山県高岡市 ホテル磯はなび）

神戸女学院同窓会報『めぐみ』の閲覧に際しては、神戸女学院大学史料室ならびに同大学図書館に便宜をはかっていただいた。感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費(23520227, 23520217)助成による成果の一部である。